

令和元年6月16日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13199

研究課題名(和文) ウィリアム・ブレイクと英国社会主義思想 職人による伝承と伝播

研究課題名(英文) William Blake and British Socialism

研究代表者

佐藤 光 (SATO, Hikari)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：80296011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：英国ロマン派の詩人であり、画家であり、銅版画職人であるウィリアム・ブレイクは、神秘主義詩人や象徴詩人として解釈されることが多い。しかし、ブレイクは、産業革命によって生じた貧富の格差に対して敏感に反応し、暮らしやすい社会のあり方を模索する社会改革者でもあった。ブレイクの社会改革者としての側面は、銅版画職人であるウィリアム・ジェームズ・リントンと、その弟子であり、挿絵画家として知られるウォルター・クレインに受け継がれた。社会改革者としてのブレイクに注目した人々のなかには、武者小路実篤の「新しき村」に関心を寄せる者もあり、武者小路自身もブレイクに関心をもち続けた一人だった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

調査の過程で、クレインを取り巻く人脈の中に、従来のブレイク受容史研究の中では論じられたことのない重要な人物が含まれていることと、その人物が実際にブレイクのいくつかの作品に積極的な関心を寄せたことを示す証拠が見つかった。また、英国社会主義思想史の水脈をたどる中で、ブレイクと武者小路実篤との接点を発見したのが大きな収穫である。従来のブレイク研究でも、武者小路実篤研究でも、この事実は知られておらず、本研究計画で当初想定した方向には含まれない発見である。拙論「武者小路実篤とウィリアム・ブレイク 共生と競争の狭間で」(『超域文化科学紀要』22号)は武者小路実篤研究に対する新たな貢献である。

研究成果の概要(英文)：William Blake, a poet of English Romanticism, artist, and engraver, is often regarded as a poet of mysticism and symbolism. Blake, however, was a social reformer, writing poems on poverty and inequality caused by the Industrial Revolution and seeking for an ideal state of society. The legacy of Blake as a social reformer was inherited by William James Linton, an engraver, and Walter Crane, an illustrator, who was apprenticed to Linton. Moreover, some of those who read social criticism in the poetry of Blake had great interest in 'A New Village' founded by MUSHAKOJI (MUSHANOKOJI) Saneatsu in Japan. For the detail of the relationship between MUSHAKOJI and Blake, see Hikari Sato, 'MUSHAKOJI (MUSHANOKOJI) Saneatsu and William Blake: Between Symbiotic Cooperation and Hierarchical Competition' (Interdisciplinary Cultural Studies, 22 (2017), pp. 23-47, in Japanese).

研究分野：英文学

キーワード：英文学 比較文学 思想史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ブレイク受容研究として参照すべき古典的な文献である G. E. Bentley Jr, *William Blake: A Critical Heritage* (1975) は、ウィリアム・ジェームズ・リントン (William James Linton, 1812-97) にもウォルター・クレイン (Walter Crane, 1845-1915) にも触れていない。ブレイク研究書誌目録として、G. E. Bentley Jr, *Blake Books* (1977) と *Blake Books Supplement* (1995) が挙げられるが、前者はリントンについて1項目、クレインについて0項目、後者はリントンについて5項目、クレインについて0項目の関連文献を掲載するのみである。近年出版された Colin Trodd, *Visions of Blake: William Blake in the Art World 1830-1930* (Liverpool: Liverpool University Press, 2012) は、ヴィクトリア朝のブレイク受容を詳細に追跡した大著であり、クレインについて一定の頁数を割いて論じているが、絵画の技術的な影響関係とヴィクトリア朝美術におけるブレイクの位置付けをめぐる議論に留まっており、クレインが英国初期社会主義運動に関わったという事実とブレイクの政治性との関連にまでは踏み込んでいない。ヴィクトリア朝英国におけるブレイク受容については、ブレイクの色彩感覚を賞賛した D. G. ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828-82)、神秘主義思想に反応した W. B. イェイツ (William Butler Yeats, 1865-1939)、ブレイクを唯美主義者とみなした A. C. スウィンバーン (Algernon Charles Swinburne, 1837-1909)、象徴詩の流れに注目したアーサー・シモンズ (Arthur Symons, 1865-1945) が有名であるが、ブレイクの政治性がリントンやクレインに受け継がれた可能性については、ブレイク受容史研究において未踏査の領域である。

筆者は拙論「明治・大正期のウィリアム・ブレイク書誌学者たち——柳宗悦、寿岳文章、山宮允」(『超域文化科学紀要』16号、2011)において、寿岳文章の『ヰルヤム・ブレイク書誌』(1929)と山宮允の『ブレイク論稿』(1929)をもとに、明治・大正期に日本で出版されたブレイク関連の文献を洗い直した。この過程で、柳宗悦著『ヰルヤム・ブレイク』(1914)は、ブレイクの政治性を的確にとらえたという意味で、注目すべき著作であることが判明し、拙著『柳宗悦とウィリアム・ブレイク——環流する「肯定の思想」』(東京大学出版会、2015)の第4章で、1910年の大逆事件に対して柳が抱いた感想をあわせて論じながら、柳のブレイク論に急進的な革命思想が脈打っていることを指摘した。また、柳が受け取ったブレイクの政治性は、その後、社会主義思想に傾倒した百田宗治や白鳥省吾ら「民衆詩派」の人々に伝わったことを、拙論「大正期におけるウィリアム・ブレイク受容と社会主義思想——井上増吉、百田宗治、白鳥省吾」(『比較文学研究』100号、2015)で明らかにした。日本のブレイク受容において、社会主義思想に共感する人々にブレイクが積極的に受け入れられたという事実は、日本に特有の現象なのだろうか。それとも、英国においても、ブレイクと社会主義思想は同じような近接性を持つのだろうか。これらの問いが本研究の出発点である。

2. 研究の目的

イギリス・ロマン派詩人の一人であるウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827) は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、社会から乖離した象徴詩人とみなされた。これは、英国におけるブレイク初期受容に関わった詩人や芸術家が、神秘主義思想と唯美主義に関心を持ち、政治性や社会性を重視しなかったことに由来する。本研究では、ブレイク初期受容の本流とは異なり、フランス革命と共和政を支持したブレイクの政治思想が、ヴィクトリア朝の銅版画師ウィリアム・ジェームズ・リントンと、その弟子である挿絵画家ウォルター・クレインによって受け継がれ、英国初期社会主義運動の一部に流れ込んだことを新たに指摘し、その諸相を解明する

ブレイクは、宗教差別を合法化する18世紀英国の政教一致体制、社会における貧困の問題、言論と思想の自由を抑圧したウィリアム・ピット (William Pitt, 1759-1806) の諸政策を告発し続けた。ブレイクが作品中に込めた社会改革を志向する意志は、マルクス・レーニン主義のような独裁的な路線とは一線を画する形で、英国初期社会主義思想の中に流れ込んだと想定できる。多様な個性の共存を理想としたブレイクの政治性が、チャーティスト運動に共鳴し、自前で雑誌を発行し、論説を書き、詩作を行い、評伝 *Life of William Blake* の図版制作を担当した銅版画師リントンと、リントン工房で修業をして、ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) の影響を受け、英国社会主義運動に積極的に参加した挿絵画家クレインに、どのように受け継がれたのかを解明することが本研究の目的である。

リントンは知名度の高い銅版画師ではない。クレインはヴィクトリア朝の挿絵画家としては知られているが、画家に準じる存在として扱われることが多く、イギリス美術史でとりあげられることは少ない。両者ともに校訂済みの全集もない。したがって、本研究は、関連する美術館、アーカイブ、大英図書館での一次資料の調査が中心となるが、一次資料を現地で収集しなければならぬところに、本研究の新規性があるとも言える。

川端康雄の指摘によると、ウィリアム・モリスの共同体社会主義は、イギリス・ロマン派と同時代人であるロバート・オーウエンの社会主義思想を継承しており、この系統の英国社会主義は、共産党の独裁体制を生んだマルクス・レーニン主義とは一線を画す(「解題」、ウィリアム・モリス、E. B. バックス『社会主義 その成長と帰結』、2014)。本研究は、オーウエンとモリスの系譜に加えて、イギリス・ロマン派の政治性の一形態としてのブレイク思想が、詩人や美学者や批評家によってではなく、リントンとクレインという職人によって受け継がれて、英国社会主義運動に合流した可能性に注目する。神は個性として人に宿り、多様な個性を互い

に尊重することが神を敬うことである、というブレイクの宗教観が、ヴィクトリア朝にどのように世俗化されて英国社会主義につながったのか、を明らかにする

3. 研究の方法

一次資料の分析に基づく実証主義の立場で研究を進める。自由と多様性の尊重を唱えたブレイクの思想が、文字テキストと視覚テキストを通して、どのようにリントンとクレインに引き継がれたのかを検証する。主な分析対象はリントンとクレインが制作した文字テキスト(随筆、論説等)と視覚テキスト(図版等)であるが、英国初期社会主義運動の流れの中でリントンとクレインがどのような人脈を形成したのかを明らかにするために、リントンとクレインのアーカイヴで、活字化されていない資料の調査を行う。リントンとクレインを取り巻く人々の証言や記録から、リントンとクレインを逆照射し、ブレイクに対する彼らの関心のあり方を解明する。

商業出版の図版制作を手がける傍ら、自作の詩に挿絵を付けて詩集を制作したブレイクのように、クレインも商業出版の挿絵制作を請け負うだけでなく、本文と挿絵の両方を自主制作した児童書を出版した。これらは Toy Books と呼ばれ、*Beauty and the Beast*, *Jack and the Beanstalk*, *The Forty Thieves*, *Cinderella*, *Valentine and Orson* などが含まれる。これらの挿絵を制作するに当たって、クレインがブレイクの絵画と日本の浮世絵版画を参考にしたことは、本人が自伝に記している(Walter Crane, *An Artist's Reminiscences*, 1907)。ブレイクと異なるのは、これらの児童書の本文が人口に膾炙した物語であるところであり、クレインがそれらをどのように書き直したのか、つまり「再話」の問題が検討すべき課題として存在する。たとえば、同時代の挿絵画家ジョージ・クルックシャンク(George Cruikshank, 1792-1878)は、クレインと同じように挿絵付き童話を出版し、もとの童話を禁酒にまつわる訓話に書き換えてしまった(谷田博幸『ヴィクトリア朝挿絵画家列伝』、1993)。クレインはどのように童話を語り直し、どのような挿絵を用意したのだろうか。クレインの芸術論を念頭に置きながら、語り直された童話の筋立て、モチーフ、登場人物の造形や挿絵のデザインにおいて、クレインがブレイクからどのような影響を受けたのかを探る。

また、社会主義運動のためにクレインが手掛けたポスター、チラシなどの図案と、クレインが童話のために制作した挿絵、ブレイクの図版の三者を比較し、たとえば、社会主義運動において悪役とされる資本家、クレインの児童書における悪役、ブレイク神話における専制的権力者とその一味との間に、共通する視覚効果や意匠が用いられているのではないかと、という仮説を立てて、この仮説の妥当性を検証する。これらの作業は、挿絵の調査が必要となるため、主に大英図書館で行う。

4. 研究成果

2017年度は大英図書館で資料の探索と収集を行った。大英図書館の方針が転換し、著作権保護対象外の文献については、研究利用を目的とするという条件でデジタルカメラによる撮影が許可されたので、ウォルター・クレインの一次資料を画像データとして集めることができた(*Walter Crane's Toy Books*, *Routledge's Coloured Picture Book*, *The Buckle My Shoe Picture Book*, *Beauty and the Beast Picture Book*, *The Song of Sixpence Picture Book*, *The Three Bears Picture Book*)。

また、これらの資料を収集する過程で、クレインが異国趣味を強調するために、ジャポニスム以外にも様々な技法を用いたことが見えてきた。同様に、一次資料の探索をすることで、クレインと接点を持った人々の連なりが少しずつ明らかになってきた。この人脈には、英国社会主義思想史を考える上で、大きな役割を果たしたと思われる人物が含まれていることが判明し、さらにこの人物がウィリアム・ブレイクの詩に関心を寄せていたことも確認することができた。本研究では、19世紀末から20世紀初頭のブレイク研究者とブレイク愛好家がブレイクの神秘主義思想に興味を持ったのに対し、職人によるブレイク受容ではブレイクが英国社会主義運動の中に流れ込んだのではないかと、という仮説を設定している。今回発見した人物の活動にブレイク受容が含まれており、またこの人物の回顧録にクレインとの交流が記されていることから、ブレイクに関する情報がクレインからこの人物に伝わったと想定できる。本研究で設定した仮説の妥当性を実証する有力な事実にとり着いたことになる。

2018年度は、引き続き、大英図書館で、20世紀初頭に刊行された社会主義に関する諸雑誌をマイクロフィルムで調査した。この人物が編集責任者を務めたある雑誌において、ある時期に集中してウィリアム・ブレイクの詩が掲載されていることを発見した。掲載されたのは、18世紀ロンドンの下層階級の生活を浮き彫りにし、貴族、国王、教会の栄華を糾弾する内容を持つブレイクの一連の詩である。これは、編集責任者が選択を行った可能性を示している。

さらに、同じ雑誌の同じ時期に、武者小路実篤(1885-1976)が宮崎県に設立した「新しき村」に関する情報が、複数回にわたり掲載されていることを発見した。これは想定外の発見であり、武者小路実篤とブレイクにそもそも接点があったのかどうかを確認する作業を、『武者小路実篤全集』全18巻を通読することによって行った。

武者小路の思想的変遷においてトルストイとメーテルリンクが占める重みに比べれば、武者小路にとってブレイクの意義は微々たるものだったのかもしれないし、武者小路とブレイクに関する先行研究が乏しい理由もそのあたりにあるのかもしれない。『武者小路実篤全集』18巻(小学館)末尾の索引では、表題に「ブレイク」を含む作品として6点が挙げられているにすぎ

ず、その内訳はブレイクとベートーヴェンを称えた短詩が一篇、ブレイクの絵画に関する随想が三篇、柳の『ブレイクの言葉』(叢文閣、1921)に関する感想が一篇、芸術家としてのブレイクに関する随想が一篇である。どれも短い断片的なテキストであって、ブレイク論と呼べるものではない。しかし、『武者小路實篤全集』全 18 巻を調査し、「ブレイク」という語を武者小路のテキストから拾い上げていくと、少なくとも 174 箇所で使用されていることが確認できた。発表年順で最も古い事例は 1913 年 7 月の『白樺』4 巻 7 号に掲載された「「或る画に就て」及び其他感想」であり、最後の事例は 1969 年 3 月に『この道』19 巻 3 号に発表された「ブレイク ダンテの神曲の挿画」である。この間およそ 55 年にわたって、武者小路は何らかの形で「ブレイク」に言及したテキストを発表しており、蚊取り線香の煙のように細々とブレイクに対する関心が持続したと言える。武者小路はブレイクにどのようにして出会い、なぜ興味を持ち、どのように受けとめたのだろうか。本多秋五が白樺派の文学と藝術受容の特徴を示す鍵言葉として提出した「「跨ぎ」の問題、或いは武者小路辰子の言葉を借りれば、「技術的展開や史的な段階を考慮しないという批判」に留意しながら、武者小路によるブレイク理解の実態を明らかにした。

端的に言えば、武者小路は『白樺』批判をする者と衝突することが多く、その衝突の中で相手を貶めるために、ブレイクの言葉を道具として用いた。この時、柳宗悦(1889-1961)がブレイクから取り出した、あらゆる存在を肯定して受け入れる寛容の精神は置き去りにされた。『天国と地獄の結婚』という異色のテキストを生んだ歴史や社会に思いを馳せることなく、武者小路が『白樺』の方針として宣言したように、「自分の肉になり血になるものは遠慮なくとる心算」を文字通りに遠慮なく実践した結果が、武者小路の手前勝手なブレイク受容だった。武者小路の姿勢は 1920 年代も 1930 年代も変わることはなかった。実証性と論理的整合性と客観性が要求される研究とは異なり、読書や美術鑑賞は主観に基づく営みであり、読者や観者が抱く感想はそもそも手前勝手なものである。そのような意味で、ブレイクを研究した柳と、柳のブレイク研究に一読者として接した武者小路との間で、ブレイクの理解度に差があるのは当然なのかもしれない。武者小路が好んだブレイクの言葉を一覽にすると、十人十色を基調とする『白樺』の中心にいたにもかかわらず、武者小路が共生を志向するだけでなく、競争と序列にも囚われていたことが見えてきた。そこに、雑貨屋の店先を際限なく広げていくかのように、各地の民藝品を水平方向に並べてみせた柳との違いがあったと言えるだろうし、それが両者のブレイク理解の程度の差でもあったのだ。武者小路とブレイクに関する調査結果の詳細については、拙論「武者小路実篤とウィリアム・ブレイク——共生と競争の狭間で」(『超域文化科学紀要』22 号)を参照されたい。

2019 年度は、19 世紀後半から 20 世紀初頭の英国におけるブレイク受容史について、調査範囲を拡大して、ウィリアム・モリスとブレイクとの接点を調べた。Pall Mall Gazette (1886 年 2 月)が行った「良書百選」に関するアンケートで、モリスはブレイクを挙げ、「Blake (the part of him which a mortal can understand)」と答えた。また「The Beauty of Life」と題した講演で、モリスはブレイクとコールリッジの音楽性に触れている。モリスはブレイクを読み、一定の評価を与えたことが確認できる。モリスの著書 *Hopes and Fears for Art* と *Signs of Change* を調べたことにより、ブレイクとモリスとの関連を考えるための手掛かりとして、以下の三つの論点をとり出すことができた。(1) モリスが装飾芸術と美術との乖離に異を唱え、生活と芸術の統合を目指したこと。(2) モリスがゴシック建築における職人の仕事に注目し、労働の喜びを見てとったこと。(3) モリスが中世の彩飾写本を美しい書物の模範と位置付けて、理想の書物を刊行するためにケルムスコット・プレスを設立し、絵画と文字が同じ頁の上に印刷される形式を選んだこと。

英国のブレイク受容史において顕著なのは、神秘主義詩人としてのブレイク像であった。しかし、ウィリアム・モリスとウォルター・クレインに注目することによって、ブレイクの社会改革者としての側面が、19 世紀から 20 世紀に活発化した英国社会主義運動の中に受け継がれたことが見えてきた。これらの研究成果の一部は、2018 年 6 月 1 日に多摩美術大学で行った講演(「柳宗悦のブレイク」)、2018 年 8 月 4 日に日本民芸館で行った講演(「総合芸術としての書物——ブレイク、モリス、柳宗悦」)、2019 年 2 月 23 日に NPO 法人向日庵講演会で発表した「寿岳文章のウィリアム・ブレイク研究」に反映させた。まだ論文としてまとめていない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

佐藤光、「武者小路実篤とウィリアム・ブレイク——共生と競争の狭間で」、『超域文化科学紀要』、査読なし、22 号、2017、23-47

〔学会発表〕(計 3 件)

佐藤光、「寿岳文章のウィリアム・ブレイク研究」、NPO 法人向日庵講演会(京都、キャンパスプラザ京都)、2019 年 2 月 23 日

佐藤光、「総合芸術としての書物——ブレイク、モリス、柳宗悦」、日本民芸館「書物工芸——柳宗悦の蒐集と創造」記念講演会(東京、日本民芸館)、2018 年 8 月 4 日

佐藤光、「柳宗悦のブレイク」、多摩美術大学芸術人類学研究所公開研究会「鈴木大拙と現代芸術」第 2 回(東京、多摩美術大学)、2018 年 6 月 1 日

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。